

下野市立細谷小学校

1 学校課題

- (1) 研究主題
主体的・対話的で深い学びの実現を目指して ～算数の授業の工夫・改善～
- (2) 目指す子ども像
 - 進んで学習する子ども
 - 学び方や考え方を身に付けた子ども
 - 自らの力で課題を解決できる子ども

2 研究計画

| 月 | 研修内容 |
|----|---|
| 4 | 学校課題研究についての共通理解 児童の実態把握 学習の手引き等を使った学習習慣・ノートの取り方の指導 |
| 5 | 算数科での「学び合い」に関する研修会実施 |
| 6 | 指導案検討 第1回学校課題研究会（3年） |
| 7 | 第1回研究会反省に基づく実践 |
| 8 | とちぎっ子、全国一斉テストの結果分析 改善策の検討 |
| 9 | 学力向上プランの作成 第1回全校一斉漢字・計算テストの実施 |
| 10 | 学習に関する意欲調査（第1回） |
| 11 | 指導案検討 |
| 12 | 第2回学校課題研究会（5年） 第2回研究会反省に基づく実践 |
| 1 | 第2回全校一斉漢字・計算テストの実施 学習に関する意欲調査（第2回） |
| 2 | 学校課題の成果の確認 研究の反省 |
| 3 | 次年度の計画 |

3 研究内容

- (1) 主な研究内容
 - ① 教師の学び合い・指導技術の向上
 - ・ 参考図書の利用
 - ・ 他校の授業研究会への参加
 - ・ 情報交換（放課後の自主的な学習会・教師相互による授業参観等）
 - ・ 本校における「主体的・対話的で深い学び」の指針作り
 - ・ 研究授業
 - ・ 教室環境づくり
 - ② 授業の創造・実践
 - ・ 教材研究（単元や場面の洗い出し・児童にどんな力を付けさせるか明確に）
 - ・ 見通しをもった指導計画（めあての提示、振り返りの習慣化）
 - ・ 課題設定、提示の仕方の工夫、板書計画、ノート指導
 - ・ 教師の関わり方（児童の発言をつなぐ指導）
 - ・ ICT機器の活用（児童や教師による説明、分かりやすい授業づくり）
 - ③ 児童の基本的な学習習慣・スキルの向上
 - ・ 学ぶ楽しさ、自ら学ぼうとする意識付け（学級活動・通常の指導）
 - ・ 計算力の向上
 - ・ プレゼンテーションスキルの向上（国語・総合的な学習の時間などに関連）
 - ・ 言語環境（読書・辞書の活用等）
 - ・ 調べる力の向上（手段・方法）
 - ・ 地域や時事問題に関心をもたせる

(2) 研究の実際

① 第1回授業研究会（3年「あまりのあるわり算」）

7時間扱いの2時間目、あまりはわる数よりも小さくなることを児童に発見させる内容である。児童にとって「分かるけど、説明するのが難しい」ことを、具体物（おはじき、たまごパック等）を使うなどして自力解決を促し、発表させた。発表の際には、書画カメラを利用し、発表者の考えが聞き手に伝わりやすくできるようにした。また、児童の発言で説明が足りないところを発表者や聞き手に問い返すことなどによって、児童の学習内容に対する理解がより深まるようにした。



授業研究会では、「教師の働きかけの工夫によって児童同士が考えをつなぎ合い、主体的・対話的で深い学びができたか」という視点のもと話し合った。指導講評では、児童による能動的な授業ができたこと、「ねらい」と「振り返り」の一体化がなされていたこと、また、児童が発見した複雑なきまりをどうまとめていけばよいかなど、ご助言いただいた。

② 第2回授業研究会（5年「分数と整数のかけ算・わり算」）

6時間扱いの4時間目、分子をそのままわることができない場合について考えさせる内容である。児童に、前時までの学習内容との違いに着目させながら、自力解決を目指した。数直線や1リットルます等の図示を容易にするヒントカードを用意したり、考えの意図を教師が問いかけたりした。児童の発表では、複数の方法で計算の仕方を説明できた。一方、計算の意味を表し説明したものを計算式に置き換えたときに、計算の意味と式とがすぐにはつながらない様子も見られた。



授業研究会では、「教師の働きかけが児童の自力解決につながったか。児童の意見をつなぐための工夫が話し合いや理解を深めるのに有効だったか」という視点で話し合った。指導講評では、前時との課題の違いを意識させながら取り組ませることが有効だったこと、児童に教科書をどう読ませるか、より合理的な方法を考えさせることによって、深い読みができることなどを助言していただいた。

4 本年度の成果と課題

(1) 成果

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」に対する意識や理解が進んだ。
- ・ 小規模特認校での、授業中における個の生かし方や、小集団の活用について学べた。
- ・ 分かりやすい授業づくりや考えを伝え合う手段として、ICT機器の活用ができた。
- ・ 児童中心の授業づくりのために教師がどのように関わればよいか、研究が進んだ。
- ・ 「めあて」と「振り返り」の一体化を意識して授業を実施できた。
- ・ 基本的な学習のしかたやノートの取り方など、全校で共通理解の上指導できた。

(2) 課題

- ・ 児童が主体的に学習できるよう、児童間で学び合う授業形態をさらに工夫していきたい。
- ・ 児童が学習内容を定着するための習熟指導や、宿題を含めた家庭学習の習慣化について保護者との連携を密にしていきたい。
- ・ 児童同士が考えをつなぐための教師の支援について、益々の研鑽が必要である。
- ・ 児童の主体的な活動や教師の適切なかかわりによって児童にとっての楽しい授業へとつながったが、教科の内容的な面白さを味わわせることができるよう、今後も教材研究など研鑽を深めていきたい。